豊樂亭記　　豊楽亭の記　　欧陽脩

使丁民知丙所一三以安二此豊年之樂一者、幸生乙無事之時甲也。

民をして此の豊年の楽しみに安んずる所以の者は、

幸いにして無事の時に生るるを知らしむるなり。

○豊樂亭…安徽(あんき)省西南、瑯琊(ろうや)山幽谷泉の上(ほとり)にあり、欧陽脩が建て、自ら記を作り、蘇軾が記して石に刻す。

豊樂亭遊春　　豊樂亭の春に遊ぶ

綠樹交加山鳥啼　　緑樹　交わり加わりて　山鳥啼き

晴風蕩漾落花飛　　晴風　蕩漾(とうよう)として　落花飛ぶ

鳥歌花舞太守醉　　鳥歌(とりうた)い　花は舞い　太守は酔えり

明日酒醒春已歸　　明日　酒醒(さ)めれば　春已(すで)に帰せん

豊樂亭遊春　其二

春雲淡淡日輝輝　　春雲　淡々(たんたん)　日輝々(きき)

草惹行襟絮拂衣　　草は行襟(こうきん)を惹(ひ)き　絮は衣を払う

行到亭西逢太守　　行き到る　亭西(ていせい)　太守に逢えば

籃輿酩酊插花歸　　籃輿(らんよ)に　酩酊(めいてい)して　花を挿(さ)して帰るならん

豊樂亭遊春　其三

紅樹青山日欲斜　　紅樹　青山　日斜めならんと欲す

長郊草色綠無涯　　長郊の　草色　緑涯(みどりはて)無し

遊人不管春將老　　遊人は　管(かん)せず　春の将(まさ)に老いんとするを

來往亭前踏落花　　亭前(ていぜん)に　来往(らいおう)して　落花を踏む